

# 提 言

## 県立美術館整備の方向性Ⅱ ～創造都市実現のための処方箋～

平成23年9月

大分経済同友会

# 1. 県立美術館整備への賛同と注文

大分経済同友会（以下、同友会）では、2011年1月に「提言 県立美術館整備の方向性 ～クリエイティブな美術館&都市づくりに向けて～」<sup>1</sup>（以下、1月提言）を大分県に対して提言したところである。

この提言の中では、アートや文化の創造力を活かして都市再生を図る「創造都市（Creative City）」<sup>2</sup>について紹介を行っている。創造都市が地域にもたらす波及効果は、美術館や芸術祭への来訪者増加にともなう交流人口拡大という短期的効果に加えて、創造的人材の育成・誘致、創造的産業の振興、地域の教育・福祉への貢献、市民活動の活発化など多岐にわたる。大分県にあっても、人口減少、高齢化が進む中で、若く創造的な才能を育成する、さらには外部から誘致してることが重要性を増すため、文化芸術を活かした個性的・魅力的なまちづくりは地域間競争を勝ち抜くうえでの鍵になると思われる。

県立美術館が単なる箱物行政に終わることなく、「県立美術館基本構想」<sup>3</sup>に掲げるように、県民に親しまれ、次代を担う子どもたちの感性・創造性を育む場となるには、こうした創造都市の理念を美術館の根幹に埋め込む必要があると考える。このため同友会では、美術館が、アートを核にさまざまな活動を行う主体（市町村、教育機関、NPO、企業等）をつなぐ交流拠点となるよう、①大分に根ざしつつ世界と共振、②まちなかとの化学反応、③ネットワークの多面的な拡がり の3項目にわたる1月提言を行ったところである。

その後、大分県は、5月に県立美術館の立地場所を大分市内の旧厚生学院跡地（OASISひろば21の北側）に決定し、8月には美術館設計者を募集する公募プロポーザルの公告を行ったところである。

大分都心部への立地は「公共交通の結節点である都市中心部への立地」という1月提言の方向性と合致しており、同友会としては県立美術館の整備に大いに賛同するものである。

ただし、立派なハード（建物）を設計・建設するだけでは、県立美術館は、創造都市を育む交流拠点とはなりえない。建物の設計を固める以前に、新美術館のプラン（ミッション、目標、計画）を明確に定め、ソフト（スタッフ、組織、運営）、コンテンツ（内容、展示）のあり方に関する方針を決めることが不可欠である。

同友会では、創造都市に関する知見を深めるべく、ナント（フランス）、エッセン（ドイツ）といった欧州の先進事例視察を7月に行った。その結果、アー

<sup>1</sup> 大分経済同友会 2011「提言 県立美術館整備の方向性 ～クリエイティブな美術館&都市づくりに向けて～」参照 (<http://www.coara.or.jp/~doyukai/>)

<sup>2</sup> 創造都市の詳細については、1月提言の他に、日本政策投資銀行 2010「現代アートと地域活性化 ～クリエイティブシティ別府の可能性～」等を参照 (<http://www.dbi.jp/investigate/area/kyusyu/index.html>)

<sup>3</sup> 大分県美術館構想検討委員会 2010「県立美術館基本構想 答申」参照 (<http://www.pref.oita.jp/soshiki/10950/bijutukankihonkousou-tousin.html>)

トによる地域活性化を図るうえでは、トップによる明快な指針の提示、プロジェクトを企画・運営する優秀なスタッフの確保、市民がアートに触れる機会を拡げる魅力的なコンテンツの提供が、極めて重要であると痛感した。

県立美術館の設計に際して、公募により広く有為な設計者を求めることはもとより重要なが、いかに優秀な建築家であれ、美術館自体の目指す方向が曖昧なままでは、見当外れで独りよがりな設計とならざるをえない。そうした結果に陥らぬよう、設計者の選定を終えるまでに基本構想をより具体化し、プラン、ソフト、コンテンツに係る結論を早急に得ることが不可欠である。

このため同友会では、1月提言で打ち出したヴィジョンを実現するため、県立美術館の整備に際して、大分県が現段階で早急に検討を行うべき項目に絞り込み、今般、提言を行うこととした。

以下に掲げる提言の実行に際しては、当然のことながら県において相応の予算措置を要するものもあろう。ただし、これらの取り組みに要する費用は、建物の建設費に比べれば小さな規模であり、にも関わらず、前者への投資を行うか否かで美術館の生き死には決まる。仏に魂を入れる手間暇を惜しんで、県の未来に禍根を残すのではなく、ソフトへの小さな投資があつてこそハードが大きな社会的便益をもたらすとの視点を持って、大分県が県立美術館の整備にあたることを強く望むものである。

以下では、次章で県立美術館整備を機に創造都市の実現を図るための11の処方箋を提示したうえで、末尾に各提言の実行に係る工程表を付した。

## 2. 創造都市実現への11の処方箋

### (1) プラン（ミッション、目標、計画）

#### 提言1 県立美術館の基本計画を早急に策定すること

県立美術館整備のための基本計画を早急に策定し、県立美術館基本構想に掲げる提案の具体化・重点化を図ることを提言する。策定に際しては、外部有識者からなる第三者委員会を設け、専門的かつ広範な知見を踏まえた検討を行うことが不可欠である。委員には、創造都市や組織マネジメントの専門家・実務家を迎え、狭義の美術領域に留まらず総合的な文化芸術振興、地域活性化の観点から今後の美術館のあるべき姿について闊達な議論を行うことが重要である。

また、県民の美術館に対する関心・意識を高め広く意見を募るうえで、基本計画ワークショップを複数回開催して、基本計画策定の議論に反映させるべきである。

基本計画の中では、新美術館のミッション（使命）、ヴィジョン（目指すべき将来像）を掲げると同時に、それらの理念をより具体化した戦略目標と、目標実現のための事業計画を固める必要がある。

事業計画の構成要素としては、運営体制（スタッフの人数・資質、想定予算を含む）、コレクション方針（収集予算の想定を含む）、事業活動計画（収蔵・展示・研究、教育普及、交流、飲食物販等）、施設整備計画（事業活動計画等を踏まえて施設内容を重点化・具体化）、協働計画（まちなかの回遊性創出、周辺地域・商店街との連携事業の実施方針を含む）などを盛り込む必要がある。

特に、美術館の適切な内容・規模は、来館者数や運営費をどのように想定するかによって大きく異なるため、これら計数面の具体的想定も踏まえた計画としていただきたい。比較的近年に開館した公立美術館の来館者数をみると、金沢 21 世紀美術館 152 万人、長崎県美術館 41 万人、青森県立美術館 27 万人、十和田市現代美術館 18 万人<sup>4</sup>であるのに対し、大分県立芸術会館の来館者数は 2 万人弱である（いずれも 2009 年度）。県都中心部に残された貴重な土地を利用する以上、美術館がまちなかの集客交流拡大の核となるべきことは理の当然であり、最低でも年間数十万人規模の来館者を達成することが求められる。目標値としては、さらに高みを目指し 100 万人以上を掲げることを提言したい。2 万人を 100 万人に増やすには、新品の建物と便利な立地だけでは不十分なことは明らかである。県民にとって魅力的であると同時に、県外からの来訪者にも訴求する魅力的なコンテンツを揃え、100 万人の過半は県外から集客するとの方

<sup>4</sup> 青森県立美術館は青森市郊外にあり、大分のような中心市街地立地であれば、さらに多くの来館者を確保できたものと推察される。また、十和田市現代美術館は延床面積 2 千㎡で、十和田市人口も 7 万人弱と、美術館・自治体とも小規模であるにも関わらず 18 万人の来館者を達成している。

針で取り組んでもらいたい。そのためには、後述する各提言の内容を基本計画に明確に盛り込み、着実に実行に移していくことが肝要である。

基本計画は遅くとも、設計者の選定までに固める必要があるが、検討経過や中間成果等を随時公表していくことで、公募プロポーザルへの参加者が提案を練りあげる際の指針としてもらうことが望ましい。

## **提言 2 基本計画に、県立美術館のミッションとして「創造都市の実現」を掲げ、「ユネスコ創造都市ネットワークへの登録」を目標に設定すること**

基本計画の中で、アートや文化の創造力を活かした都市再生、すなわち「創造都市の実現」を、県立美術館が果たすべきミッションとして明確に掲げることが提言する。「創造都市」は、基本構想が謳う「大分らしい美術館」の理念と通底し、これをさらに発展させたコンセプトといえる。

あわせて、基本計画には明快な目標を設定することが肝要である。提言1で言及した来館者数も重要な指標だが、単に量的に拡大すればよいというのではなく、最終目的は創造都市の実現にある。冒頭に述べたように、創造都市のもたらす効果は多岐にわたるため、個々の効果について適切な目標を掲げることが重要だが、それらを集約し、かつ一目で分かる目標として「ユネスコ創造都市ネットワークへの登録」を目標として設定することを提言したい。「創造都市ネットワーク」は、ユネスコが、文化の多様性を保護し世界各地の文化産業のポテンシャルを都市間の戦略的連携により発揮させるための枠組みとして2004年に創設したもので、わが国では、神戸市、名古屋市、金沢市が指定を受けている。基本的には市を対象とした枠組みだが、例えば、大分・別府・由布という広域都市圏としての登録の可能性を検討する価値はあろう。大分県の創造都市としての存在感を広く国内外に示すうえで、意欲的かつ戦略的に取り組むべき目標と考える。

## **(2) ソフト（スタッフ、組織、運営）**

### **提言 3 県立美術館の中核スタッフを早急に選定し、責任と権限を持って、美術館設計者と協議できる体制を整えること**

プランが求める美術館像を実現するには、それを遂行するためのソフト（スタッフ、組織、運営）が次に重要であり、彼らスタッフが活動するためにどのような空間が望ましいかというハード（建物）の議論は、最後に来るべきものである。ゆえに、建物の設計が固まった後に、スタッフを選ぶという順番では、極めて使い勝手の悪い美術館になると懸念される。このため、県立美術館の中核スタッフ（館長候補者や中核的学芸員）を早急に選定することを提言する。

スタッフ選定時の条件として、現代アートや創造都市に通暁し従来型の美術館とは異なる視点から新たな美術館像を描けること、美術館の建築面について

も見識を持つこと、海外にも通用するキャリアを有することなどが挙げられよう。

こうして新美術館にふさわしいスタッフを選んだ後は、彼らに全幅の信頼を寄せ、美術館の設計・企画・運営に対する権限と責任を与えることが不可欠である。金沢市では、金沢 21 世紀美術館の館長を副市長級のポストとして招聘したと聞くが、大分県においても、美術館の中核スタッフに強いリーダーシップを発揮させるには、行政内部での役職、位置づけは極めて重要であろう。

#### **提言 4 県立美術館の開館に向けて、アートに対する県民の関心や意識を高めていくこと**

県民に親しまれる美術館をつくるために、開館を待つことなく、アートに対する県民の関心や意識を高めていく取り組みを順次行っていくことを提言する。ハードとしての美術館の開館は 2015 年春だとしても、ソフトとしての美術館はすでに開館しているとの意識を持って、新しいアートの動向や創造都市のコンセプトを紹介・普及させるアートイベントやワークショップの開催など、さまざまな事業を展開していただきたい。特に、公募プロポーザルの過程で、応募者の設計提案をテーマにした展覧会をまちなかで開くなど、広く県民の関心を呼び覚ます仕掛けが重要である。

また、2012 年には別府市で別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の開催が予定されている。こうした機会を捉えて、現代アートや創造都市の魅力を県民に分かりやすく伝えていくと同時に、県外から訪れる大勢の来訪者に対して、大分県全体としての創造都市の取り組みをアピールしていくことが望まれる。

#### **提言 5 県立美術館が県都大分の活性化に寄与するよう、大分県、大分市、民間等が対話・協働する仕組みを早急につくること**

県都大分では現在、都心南北軸の整備が進んでおり、県立美術館には、こうした中心市街地の動きと連携してまちなかににぎわいを生み出すことが求められる。南北軸の整備には、県の他にも大分市や商店街、JR九州、バス事業者など多くの主体が関わっており、大分県、大分市、民間等が対話・協働する仕組みを早急につくることを提言する。その際、県立美術館と大分市美術館との役割分担と協働の仕組みについての検討は必須である。

以上のような取り組みは、大分都心部の活性化ばかりでなく、美術館が県域全体にわたる創造都市の交流拠点として存在感を発揮していくうえでも重要である。

#### **提言 6 県立美術館が、創造都市の交流拠点として大分県全域の活性化に貢献できるよう、官民連携による交流組織のあり方を検討すること**

創造都市の実現に向けて、さまざまな地域主体が連携する手法は、大分県が産業分野で進めるクラスター構想とコンセプトが通底する。創造都市を目指す

取り組みを「文化芸術創造クラスター」<sup>5</sup>として捉えた場合、専門家（学芸員）を擁して調査研究・企画展示を主たる役割とする美術館と並んで、交流機能を担う組織が必要となる。当該組織には、柔軟かつ軽快なフットワークが求められることを踏まえれば、県内各地の美術館、教育機関、大学・研究機関、NPO、クリエイター、企業、産業団体、県、市町村等から構成される交流組織（仮称）クリエイティブ・クラスター・ネットワーク（以下、CCN）とすることが考えられよう。こうした官民連携の交流組織のあり方を検討することを提言する。

CCNには、県立美術館と連携して県内アートのハイエンドを担うと同時に、より県民生活に密着したレベルで地域の文化・歴史の掘り起こしを行い、県民の文化活動を活性化していく役割も期待される。

提言5に示した県都大分における対話・協働の仕組みは、広く全県を活動領域とするCCNへと発展的に拡大・解消していくことも考えられよう。また、CCNを、提言2に示したユネスコ創造都市ネットワーク登録に向けた推進機関と位置づけることも可能であろう。

### （3）コンテンツ（内容、展示）

#### 提言7 県立美術館の顔となる現代アートの作品群の制作・展示計画を早急に決めること



イル・ド・ナント（ナント島）をのし歩く 「巨象」 バウハウス様式のツォルフェライン第12立坑（エッセン）

県立美術館の新たな顔となる作品群の制作・展示計画を早急に決めることを提言する。現・県立芸術会館には優れた収蔵品も多いが、残念ながら収蔵品展への来館者は極めて少ない実態があり、建物が移転しただけで来館者が増えるものではない。また、人気のある企画展は予算規模も大きく、年に何度も開けるものではないため、いかに常設展示の集客力を高めるかが鍵となる。

<sup>5</sup> 日本政策投資銀行 2011「文化芸術創造クラスターの形成に向けて ～美術館からひろがる創造都市～」参照 (<http://www.dbi.jp/investigate/area/kyusyu/index.html>)

このため、県民、特に次代を担う子どもたちがアートの魅力に気づく契機となり、また、県外来訪者にも訴求力のある新しい作品の制作・展示が不可欠である。そうした間口の広い作品をゲートウェイとして、来館者が従前の収蔵品にも興味を持つ機会を提供し、県立美術館のファンを内外に増やしていくことが肝要であろう。

同友会としては、今般の欧州視察の経験を踏まえ、サイトスペシフィック<sup>6</sup>でインパクトの強い大型の現代アート作品を、新たにアーティストに制作・展示させることが、美術館全体の集客力の底上げにつながると考える。ナントでは、全高 12 mに及ぶ絡繰り仕掛けの「巨象」が、市民や観光客を乗せて公園をのし歩く姿が、SF作家ジュール・ヴェルヌ生誕の地であり、かつて造船業が栄えたナントの新たなシンボルとなっていた。造船所跡を改装した工房では、さらに新たな巨大絡繰りが構想・開発中だという。また、エッセンでは、ルール炭坑の廃坑という負の遺産を「世界で最も美しい炭坑」として積極的に保存・活用し、世界遺産の認定も受けて、地域の新たなランドマークとしていた。

大分県内でもこの夏、アーティストのテオ・ヤンセンが制作したビーチアニマルが各地を席捲し、多くの人々がたいへんな感動を持ってその姿を見守っている。このビーチアニマル以上にインパクトが強く、子どもたちの創造性を喚起し、しかも、大分まで訪れないと体験できないサイトスペシフィックな作品群が、県立美術館の新たな魅力づくりには求められている。

## **提言 8 共通する物語性を持つインパクトのある現代アート作品を都心南北軸（県立美術館、大分駅前、中央通りなど）に設置すること**

提言 7 に示した作品群の設置場所は、県立美術館の敷地内だけとは限らない。都心南北軸は、県立美術館以外にも OASIS ひろば 21、大分県立芸術文化短期大学、大分市美術館、大分市アートプラザ、大分市複合文化交流施設が集積する大分の文化軸である。これら施設を南北に結び、回遊性とにぎわいを生む仕掛けづくりを行うことを提言する。

具体的には、共通する物語性を持つインパクトのある現代アートの作品群を南北軸に配して、エリア・施設間を一つのストーリーでつないでいくことを提言する。特に重要なのは、大分駅前～中心市街地～県立美術館の動線である。大分駅前に、大分の新しい顔となるインパクトを持ったアート作品を配し、県立美術館にも共通する物語性を持った作品を配置する。駅ビル整備により一大集客施設と化す駅前から県立美術館までの回遊性を促す仕掛けとして申し分のないものといえよう。さらに、両者の間にある中央通りや商店街にもアート作品を点在させることが重要である。

もちろん、以上のようなプロジェクトは大分県のみではなく、大分市や民間等との協働によって相乗効果を発揮していく必要があり、こうした点からも提言 5 の取り組みが強く要請される。

---

<sup>6</sup> サイトスペシフィックとは、アーティストが作品の設置場所を念頭に置きながら、その土地ならではの作品を制作したものを指す。ここにしかない、ここでしか体験できない、ここでなければ意味を持たない作品は、美術館の強い個性・特色となり、それを目的に美術ファンが遠方から訪れることもある。

# 現代アートで交流人口とまちなか回遊性を増す



大分らしい美術館  
「大分スタイル」の  
どこにもない地域の  
美術館

大分県立美術館  
+ 100万人以上の利用者

オアシス21

県立総合文化センター  
利用者120万人/年

共通する物語性を持つ  
インパクトある  
現代アート作品を設置

- ・ 強烈な体験
- ・ わくわくする
- ・ 何度も見たい
- ・ 語りたくなる

人の回遊性を創出

大型店エリア

駅前から北への  
人の動線を

R.10 超え

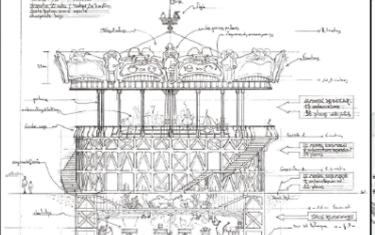
商業施設集客数予測  
1,000万人超/年  
(鹿児島アミュプラザ以上を想定)

大分駅乗車人数 597万人/年  
(H21 16,373人/日 JR九州発表)

大分駅  
商業施設

まちなか移動手段として  
交通機関を導入  
(デザインされた小型低床バス、LRT等)

大分市複合文化交流施設



#### 提言9 「食べる」「買う」ことを重視した美術館の魅力づくりを行うこと

美術館内に設けられるレストラン、カフェやミュージアムショップも、県民や県外客が美術館を訪れる大きな動機となりうるため、来館者が「食べる」「買う」ことを重視した美術館の魅力づくりを行うことを提言する。

例えば、レストラン、カフェについては、店内にアーティストの作品を大胆に設置する、2階テラスにオープン・イメージの近隣にはないタイプの洒落たカフェを誘致することなどが考えられる。ミュージアムショップについては、既製のアート商品を販売するだけではなく、アーティストやデザイナーの手になるオリジナル商品（新商品開発には限らず、県内の土産品に新しいパッケージを施し付加価値を高めることも重要）を扱うセレクトショップとするなどの取り組みが考えられよう。

飲食物販については、館内だけではなく、近隣の商店街・飲食店街との連携も重要である。美術館整備を機に、商店街等のサイドで、アートマネジメントができるマネージャーやNPOを誘致・育成し、まちなか自身のオリジナリティを高めつつ、商店街と美術館で連携イベントを開催していくことも検討すべきである。

### (4) ハード（建物）

#### 提言10 県立美術館の設計は、設計者選定と並行して具体化されるプランなどを踏まえ、現代アートの潮流に対応できるものとする

公募プロポーザルは設計コンペと異なり、「設計」ではなく「設計者」を選ぶものである。適切な人材を選定するうえで、できるだけ具体的な建築イメージを提案させることは重要だが、最優秀提案がそのまま実現されるわけではない。冒頭に述べたように、美術館のプラン、ソフト、コンテンツはハードに先行して決定すべきものであり、県立美術館の設計は、設計者選定過程と並行して具体化されるプラン、ソフト、コンテンツを踏まえたものとすることを提言する。

特に、提言7で示した大型作品は美術館と一体化した展示となるため、設計段階で、建物の構成と作品の内容・配置をすり合わせ調整を図る必要がある。こうした観点からも、設計提案の通りに建てるのではなく、新規コンテンツにあわせて柔軟に設計変更ができる余地を確保することが不可欠である。

具体的には、美術館の屋外空間を広く確保してサイトスペシフィックな巨大作品の設置スペースとすること、常設・企画展示室は大型インスタレーション<sup>7</sup>などの展示も可能な面積・天井高に余裕のある設計とすること、常設展示室の過半を現代アートの展示にあてることを提言する。

<sup>7</sup> インスタレーションとは、場所や空間全体を作品として鑑賞者に体感させるアート作品のこと。

## 提言 1 1 県立美術館整備にあわせて新たに移動手段を導入し、まちなかの回遊性を高めること

同友会では 2010 年 8 月に「提言 県都大分の交通体系について」<sup>8</sup>を大分市、大分県、国土交通省に提出し、公共交通・歩行者重視のまちづくりを提言したところである。大分市ではその後、都心南北軸のトータルデザインを担当する設計者を 9 月に選定した<sup>9</sup>。都心南北軸の整備により、今後数年の間にまちなかの交通環境は大きく変化する可能性が高い。

このため、県立美術館の整備にあわせて、まちなかの回遊性を高めることを提言する。具体的には、まちなかの移動手段として小型低床バスを新たに導入し、県立美術館～中央通り～大分駅～駅南（複合文化交流施設、大分市美術館）の間をシャトル運行させることが考えられる。同友会が視察を行った欧州の諸都市では、公共交通機関に斬新なデザインを導入することで、それらの交通機関が都市の個性を演出するシンボルとなった事例が見受けられた。大分においても、小型低床バスのデザインをアーティストやデザイナーに委ね、まちなかの新しい顔づくりを行うことが考えられる。

美術館の設計においても、都心南北軸をめぐる交通環境変化を着実に踏まえる必要がある。例えば、歩行者重視の観点からは、県方針にあるように、県立美術館と OASIS ひろば 21 を 2 階同士でつなぎ、徒歩による回遊性を確保することが重要であろう。また、子どもでにぎわう美術館を目指すには、学校・学級単位での来館に備え、大型バスが 1 階に横付けできる構造とすることも求められる。

平成 23 年 9 月

大分経済同友会

代表幹事 小 倉 義 人

代表幹事 梅 林 秀 伍

---

<sup>8</sup> 大分経済同友会 2010 「提言 県都大分の交通体系について」 参照 (<http://www.coara.or.jp/~doyukai/>)

<sup>9</sup> 大分市「大分都心南北軸整備事業」 参照 (<http://www.city.oita.oita.jp/www/contents/1299558704924/index.html>)。

特に、最適任者として選定された設計者の案については以下を参照 (<http://www.city.oita.oita.jp/www/contents/1299558704924/activesqr/common/other/4d774b51002.pdf>)

【付表】 創造都市実現への11の処方箋 工程表

| 設計・建設スケジュール | 2011年度   |  | 2012年度   |  |  | 2013年度   | 2014年度   | 2015年度以降   |  |
|-------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|             | 8-9月<br>公募   | 10-12月<br>12月選定  | 1-3月   | 4-6月   | 7-9月   | 10-12月   | 1-3月   |  |  |
| プラン         | 美術館基本計画の策定<br>ミッション、目標の設定<br>中核スタッフ選定と責任・権限付与<br>設計提案をテーマに展覧会        | 基本計画の策定<br>ミッション、目標の設定<br>中核スタッフ選定と責任・権限付与<br>設計提案をテーマに展覧会           |
| ソフト         | 開館に向けた県民の関心・意識の高揚<br>大分県・大分市・民間等の対話・協働<br>官民連携の交流組織の検討               |
| コンテンツ       | 美術館の顔となる現代アート作品群の制作・展示<br>都心南北軸への現代アート作品の設置<br>「食べる」「買う」ことを重視した魅力づくり |
| ハード         | プランなどを踏まえた、現代アートに対応できる設計<br>新たな移動手段の導入によるまちなかの回遊性向上                  |